

内 容

* 情報共有セミナー詳細報告(1)

○ 尾道のぞみ会の活動報告

橋本 周治

* 情報共有セミナー詳細報告(1)

4月号にて4月20日実施の情報共有セミナー概要をお知らせしましたが、今月より数回にわたり当日ご報告いただきました「各地の実践報告」を掲載させていただきます。



新橋駅前 AP新橋の入るビル

○ 尾道のぞみ会の活動報告

橋本 周治

尾道のぞみ会は、障害福祉サービスと相談支援事業、地域生活支援事業を行っております。基本的な活動は以前から変わっておりませんが、以前から変わったという事で考えますと、尾道市と共同で行っている「こころサポート事業」があります。

「こころサポート事業」は平成30年度から尾道市からの委託を受けて行っておりますが、この事業は元々自殺対策で始まりました。実は恥ずかしい話ですが、尾道市は自殺率が飛びぬけて県内ワーストでした。この状況を何とか改善したいという事で、尾道市と一緒に始めた事業です。

先ず、孤立孤独、その様な状況にある方々を適切な機関につなぐ事ができれば良いのではないかと、いところからスタートしました。主な対象者として、未受診だが治療が必要と思われる方、治療を中断されて生活のしづらさを抱えている方、精神疾患が原因と思われるひきこもりの方、及びご家族の方へのご支援という事で開始しております。

尾道市は、こころサポート事業と似た事業で「ひきこもり等支援事業(みらサポ)」や「生活困窮者自立支援サポート事業(くらサポ)」も行っておりますので、これらとかなり重複する部分があります。でも重複する部分は連携していこうという事で進めております。

触法の方でメンタルヘルスに課題のある方からのご相談というところでは、司法関係機関との連携を含めて取り組んでおります。しかし相談内容はとても複合的で複雑化しており大変難しい状況です。

また初対面時に入口に立たせて頂ければ良いのですが、なかなか難しく「めげない心」が必要になります。相談者において多くの場合、初めて相談に来るときは既に困り切っている状況になっています。その

ためスタート時点で介入が非常に難しい状態で、良好な関係を結ぶまでに多くの時間が必要になります。

事業開始前までは精神疾患の治療が必要と思われる場合、保健師や指定医が措置入院や医療保護入院という強制的な入院を主として対応していましたが、その様な方法を我々は選択しないという事が非常に重要なことで、ひたすらご本人との関係を大切に、長い年月をかけて築いていきます。入口で拒否されれば手紙を書いて「読んでね」とか「飲み物を 1 本置いてくる」という様な感じで対応しています。この様に地道に・地道に少しずつご本人との関係性を縮めています。そのためペースとしては遅くなり沢山取り組むことは出来ません。県内ワーストという事もあり関係機関から寄せられるご相談は非常に多くあるのですが、現在全てのご相談に対応することは難しい状況です。

成果という面では、なかなか出ないのです。令和 4 年度のデータですが、直接支援や関係者との連絡調整などのやり取りは 1,657 件で 1 日 10 件もありませんから、決して多くはありません。でも増加傾向ではあります。

そして社会的孤立状態になっている方の状況といえ、やはり統合失調症とうつ病の方が圧倒的に多いです。詳細は追って表でご紹介しますが、未受診の方で治療に繋がった方が 16 件で最も多かったと思います。数字だけで見ると 16 件しか無いのかと思われるかもしれませんが、先ほども言いましたが関係性を作るのに時間を費やしていますので、我々としては良く出来た数字と考えています。

実践から見えた地域課題としては、ひきこもりの方とその家族を支援する場所が身近に有ると良いという点です。尾道市と三原市で尾三圏域といいますが、圏域では三原市の小泉病院が専門相談場所になっていますが尾道市にはありませんので、アクセスが難しい状況があります。2022 年から社会福祉協議会内にひきこもりステーション(みらサポ)が出来ましたが、「みらサポ」等の専門職から我々への相談件数も多くあり、連携強化を図っていく必要があると感じています。

アディクション、特にアルコールに関するご相談の件数が多く、治療を行う医療機関の充実が課題と思われれます。アディクション治療を行うクリニックは有りますが、数が少なく選択肢が限られてしまいますので、増えたら良いと感じています。

また尾道市は島が沢山ありますし山間部もあり、過疎化が進んでいる地域も多くあります。高齢化率が 85%という地域もあり、尾道市内だけでも地域格差があります。その様なところにも相談者はいますので、往診システムが確保できたら良いと考えます。御調町というのは山間部なのですが、総合病院に精神科は有りますが往診が有りません。また島嶼部である因島や瀬戸田には三原市の精神科病院がクリニックを月 1 から 2 回開設していますが、対象者がその精神科病院に通ったことが有る方ということに限定されていますので、それ以外の方の診察が対応できません。尾道市内広域で精神医療にアクセスできるシステムが有ると良いと考えています。

その他では専門職(医師・看護師・OT 等)によるアウトリーチが必要と感じています。但しこれも 1 か所に専門職を集めるというのは運営費的に難しい部分が有ると思います。尾道市も財政的に負担が大きくなると思いますので、今ある地域のネットワークを活用し、対象者ごとにチームを作っていける対応ができたらいと思っています。

令和 4 年度の新規相談は 26 件で、その内 8 割が 30~50 歳代で働き盛りの世代のメンタルヘルスというところのご相談がとて多いです。この世代が突出していると言っても良い位のデータになっています。

医療中断や社会的孤立が目立っていますので、医療にアクセスしにくい環境が有るのかご家族も含めて支援力が希薄なのか、地域環境の検証が必要と感じています。

それから相談の経路として、地域包括や相談支援からが多いですが、一方で市の関係機関や精神科病院からの相談は減少しました。その原因は不明ですが、今後「にも包括」のシステムを構築しないといけなく、今後増加するであろうメンタルヘルスの課題については関係機関と連携を取っていく必要が有ると思っています。予防や重症化を防ぐという観点からも相談支援体制の整備が必要と感じています。

そもそも自殺対策から始まった事業とお話してきましたが、この事業を始めて自殺率は改善されたの

か？といえば、そこまで改善はしていません。ワーストでは無くなりましたが、自殺率としては改善されていません。但し、特異なケースというのは少なくなりました。自宅に放火して自殺を図るなどの特殊な自死は減少しているとのことです。

それで実際のデータですが、令和4年は51名の対象者がいまして、その内の6名が新規の方です。終了者も5名ほどいます。この方々は適切な関係先に繋がり、夫々が地域で自立しながら生活が可能になったという事で手を引いています。また年代別では先ほど30～50歳代といいましたが、登録者と登録外でこの様になっています。この事業は登録制なのですが、登録外の方でも支援はしていますので、どちらを見てもこの世代が突出しているのが分かります。また因島・瀬戸田地区は社会資源が圧倒的に少ないので、孤立・孤独を感じる方が多く、かなり特殊な難しさがありますし、地域性もあるように感じています。以前は外国の方もいらっしゃいました。造船関係の仕事をしている外国人労働者の方でしたので、支援者がスペイン語の辞書を持って対応していたようです。今であればグーグル翻訳などで対応できたのでしょうか。

支援のキッカケとしては、医療中断や社会的孤立なのですが、社会的孤立というのはご家族や地域の民生委員の方からのご相談が寄せられることです。

支援のキッカケとしては、医療中断や社会的孤立なのですが、社会的孤立というのはご家族や地域の民生委員の方からのご相談が寄せられることです。

考察として、新規相談における登録者・登録外の全数は26件で、そのうち8割が30～50歳代に集中しています。そして支援のキッカケは医療中断が多いです。そして相談の経路としては、相談支援事業からが多いですが、新しい事業開始に伴い、くらしサポートやみらいサポートからの相談も増えています。勿論地域包括からのご相談も沢山寄せられていまして、高齢者関係からのご相談も多くあります。一番多いのは皆さんの地域でも同じかもしれませんが、地域包括がご家庭に入ったところ、どうも息子さんに精神疾患が有るのではないかとか、同居しているご家族が発病しているのではないかと感じているというご相談で、家族全員の支援が必要という様な場合もあります。この様なケースが最近が増えてきたように感じています。また8050や9060という問題もあります。

これらを踏まえて令和6年度はどのような事を行っていくかという事で、これまでと同じことは続けていきますが、国から示しの有りました「地域共生包括化推進」「重層的支援体制整備」「にも包括」「法改正」等も視野に入れ、軸となる「社会的復権」「権利擁護」等を意識して体制整備に努めていきたいと考えています。

尾道市こころサポート事業実績報告【令和4年度分】

1. 支援実績

a) 対象者について

登録者	登録者			今年度登録外対応	今年度累計対応者
	待機者	停止中	終了者		
51人（うち新規6人）	0	0	5	20	71

※ 登録者：事業対象者。事業開始からのものを含む
待機者：ケア会議を実施したが、支援の対象とならなかった者
停止中：入院などを理由に訪問支援を拒否した者

※ 昨年登録45人
※ 総累計対応者数：161人

◆ 年代別

	登録者	登録外
10代		
20代		1
30代	1	6
40代	3	3
50代	2	7
60代		
70代		2
80代		1
不明		
合計	6	20

◆ 地域別

	登録者	登録外
旧尾道	4	13
御調	1	
因島	1	4
瀬戸田		1
市外		2
合計	6	20

b) 支援のきっかけ

	未受診	医療中断	頻回入院	長期入院後退院者	社会的孤立	その他	合計
登録者		4			2		6
登録外	1	9			7	3	20

c) 受付経路

	市関係機関	包括	精神科医療機関	保健所	福祉関係事業所	くらしサポート・みらいサポート	民生委員	家族	市民	ハローワーク	広島保健観察所	警察	その他	合計
登録者	2	1			1	2								6
登録外		4	2		7	4			1		1	1		20

重層的支援体制整備について尾道市は今年の4月からスタートしましたが、未だ形に何もなっていません。ただスタートしましたというだけで、これから形を作っていくことになります。

対象者ですが、これまでは18歳以上の方でした。しかし高校中退や中学卒業生など、18歳以下の若年層のご相談が段々増えてきています。そこで表向きは18歳以上としていますが、内規として対象年齢を16歳まで引き下げ若年層の対応も行っていこうということになりました。

対象者一人一人にチームを作るのですが、ケースに応じて地域の医療機関や福祉職、市の行政を含めてアウトリーチチームを編成します。支援内容は個別にカスタマイズします。

体制としては、尾道のぞみ会からは2名の職員を派遣しています。そして市からは保健師2名が「こころサポート」の担当として動いています。合計4名が中心となって動いています。

先ほど事例報告でもお話ししましたが、ご家族を支援するときに引きこもりが疑われる方がいらっしゃるので、地域づくりの観点でも支援を充実させていく必要があります。

そして予防の観点から教育機関との連携を本年度は重点的に行っていこうと考えています。実は教育機関からのご相談が多くありますので、ここはとても重要だなと感じています。精神科の受診ハードルを下げるためには、教育から取り組むしかないと考えますし、もしかしたら教員が発病しているのではないか、と思うケースも多々見受けられます。お子様・ご両親・教員に対してメンタルヘルスの課題に、早期に気付ける仕組みを検討していきたいと思えます。実際教育委員会にお聞きすると、メンタルヘルスの不調で休職している教員が激増しているというご相談もありますので、これは喫緊の課題と感じています。

それ以外の取り組みとしては、これまで感じていた課題についても引き続き十分に行っていきます。

最後になりますが、2023年度は受診に繋がる成果が6件で、2022年度は16件で一気に10件も減少しました。必ずしも成果数を増やすのが目的ではありませんが、何故減ったのか、について事業の啓発が足りているか、複合的な課題のある方が増加し成果が出にくい状況にあるのか、等の検証を今後はしていこうと考えています。

以上になります。



—編集後記—

4月20日(土)に第1回目の情報共有セミナーが開催されました。セミナーは各地での夫々の活動を知り、今後の自組織の活動に生かしてゆくことを目的としています。

今回は尾道のぞみ会の橋本さんから、実践されている障害福祉サービスと相談支援事業、地域生活支援事業に加えて、平成30年度から尾道市と協働されている「こころサポート事業」について活動報告をいただきました。尾道市は広島県の南東部に位置し、南は瀬戸内海に面し、北側には尾道三山と呼ばれる山がそびえる海と山に囲まれた自然が豊かな街です。こころサポート事業は、精神疾患が原因と思われるひきこもりの方やご家族の方など孤立孤独な人々を適切な機関へと繋ぐことを目標としてスタートしていますが、ひきこもり支援、生活困窮者支援など他の事業との連携で関係機関からの相談や地域包括からの高齢者関係の相談もある。重層的支援体制も整備されているため若年層の相談が段々増えてきていることなどその相談内容は多岐に渡っています。働き盛りの世代のメンタルヘルスの相談も増加、医療中断や社会的孤立が目立つなど地域での課題がある中で、ひとつひとつの相談を丁寧な関係作りに時間を掛けて取り組んでいます。

今回の報告の中で注目したことは、その原因は不明であるが「相談の経路として地域包括や相談支援からが多く、市の関係機関や精神科病院からの相談は減少した。」とありました。ここ数年、私が活動している地域でも相談経路に関して同様の状況になっている。原因を探りたいと思いました。

残念ながら、今回のセミナーに参加することは叶いませんでしたが、こうして各地の皆さんの活動を知ること、「新しい発見」「同様の悩み」「これからも頑張ろう!」といった思いがこみ上げてきました。

「橋本さん、お疲れさまでした。」(m.shiida)

特定非営利活動法人 精神保健福祉交流促進協会